

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：42202

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20265

研究課題名（和文）倫理・哲学・宗教知識に基づく価値教育への橋渡しとしての初等教育での道徳授業構想

研究課題名（英文）"Concept of Moral Education in Elementary Schools as a Bridge to Value Education Based on Ethical, Philosophical, and Religious Knowledge"

研究代表者

平岡 秀美（Hiraoka, Hidemi）

國學院大學栃木短期大学・その他部局等・講師

研究者番号：10962425

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、宗教・倫理・哲学などの「価値」に関わる諸知識を基盤とした価値教育を行う準備段階となる初等教育段階の道徳教育構想をドイツの事例に究明することであった。2022年度には、ドイツの価値教育の論点整理の一環として、ハイトの所論に着目した。2023年度には、教科書“Leben leben”の第1巻から第4巻を検討した。その結果、全巻に共通する点として、「コンピテンシー志向」「言語活動の重視」「テキストを用いた関連知識・学問の顧慮」「問いを中心とした活動」という傾向が見られた。さらに、4巻での発展的構造として「問い」に基づくモジュール・システムの採用という教授上の工夫が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、宗教・倫理・哲学といった「価値」に関わる多様な諸知識を基盤とした価値教育への「橋渡し」となる初等教育段階における道徳教育を構想するための一助となりうる。具体的には、教科書分析によって得られた、中等教育オリエンテーション段階から前期・後期中等教育段階で共通する「コンピテンシー志向」「言語活動の重視」「テキストを用いた関連知識・学問の顧慮」「問いを中心とした活動」という傾向が、「問い」に基づくモジュール・システムに統合されていく教授構想の解明である。この構想は、小中学校での「特別の教科道徳」と高等学校での「公共」「倫理」との方法・内容的関連・一貫性に関する議論の深まりに寄与しうる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to investigate the concept of moral education implemented at the elementary education level as a preparatory stage for value education based on various forms of knowledge related to values such as religion, ethics, and philosophy, using Germany as a case study. In 2022, I focused on Haidt's theory as part of an overview of the key issues in German value education. In 2023, I reviewed volumes 1 through 4 of the textbook "Leben leben." As a result, common trends observed in all volumes included a "competency-oriented approach," emphasis on "language activities," consideration of related knowledge and disciplines using texts, and "question-centered activities." Furthermore, as an advanced structure in volume 4, it was revealed that a modular system based on "questions" was adopted as an instructional innovation.

研究分野：教育方法学

キーワード：道徳教育 倫理科・哲学科 小・中・高接続 教科書分析

1 . 研究開始当初の背景

近年日本の教育改革において、道徳教育に関する改革は象徴的なものである。具体的には、小中学校での道徳教育が教科化され、高等学校では公民科の「公共」及び「倫理」ならびに特別活動が人間としての在り方生き方に関する中核的な指導の場面とされている。しかし、これらの小中学校における「特別の教科 道徳」と高等学校における「公共」「倫理」との内容的関連や一貫した指導理論・方法が十分に議論されているとは言い難い。こうした状況に対して、ドイツにおける倫理・道徳教育科目の改革動向示唆的である。

2 . 研究の目的

本研究の目的は、宗教・倫理・哲学などの「価値」に関わる諸知識を基盤とした価値教育を行う準備段階となる初等教育段階の道徳教育構想をドイツの事例に究明することである。

3 . 研究の方法

具体的な教育構想の検討の前提整理のために、まずはドイツの価値教育関連の教授学的議論の検討を行う。これを踏まえ、初等教育段階・オリエンテーション段階から前期・後期中等教育段階まで幅広く展開されている教科書シリーズ „Leben leben ” の第 1 巻から第 4 巻を分析し、その方法・内容的共通点と発展的構造を解明する。

4 . 研究成果

本研究の目的は、宗教・倫理・哲学などの「価値」に関わる諸知識を基盤とした価値教育を行う準備段階となる初等教育段階の道徳教育構想をドイツの事例に究明することであった。

本研究に関する 2022 年度の研究成果は、以下の研究論文に集約される。

- ・ 平岡秀美 (2023) 「ドイツの価値教育 (Werterziehung) における『基本的価値』の取り扱いに対するハイト (Heid, H.) の批判と代替案：価値づけの『根拠の論究』を志向する教授構想に着目して」『教育方法学研究』(19)、教育方法研究会、101-112 頁。

ここでは、まず、価値教育の議論における「価値」の性質と取り扱い方についての教授学的批判を取り扱った。具体的には、価値教育を行う際の「価値」の性質とその扱い方についての原理的な批判を行ったハイト (Heid, H.) の所論に着目し、ドイツの価値教育に関する原理的批判の内容を明らかにした。これにより、日本における道徳教育実践の「道徳的諸価値」の取り扱いについての反省的な方法論的示唆を得ることを意図している。

こうした意図のもと、三つの課題を遂行した。第一の課題として、ハイトの主張の背景を捉えるために、70 年代以降のドイツにおいて「価値教育」が求められていく経緯を概略的に捉えた。ここでは、ハイトが彼の批判の背景として挙げていた社会状況は、「価値の崩壊」を嘆き、「基本的価値」という価値に立ち戻ろうとする状況であり、その流れの中で、価値教育科目の必修化が推進されていったということが明らかになった。

第二の課題として、上記の社会的経緯の中で、「価値教育」について教育学においていかなる議論が展開され、ハイトはそれをどのように批判したのかを明らかにした。ハイトの批判は絶対的で客観的な実体を持つ「基本的価値」の存在を前提とするような価値についての哲学理論と、そうした理論に根拠づけられた道徳教育理論に向けられていた。そして、その理論に対して「具

体的価値」と「基本的価値」の区別の必要性を強調し、抽象的な価値を実際に適用する際の、具体的な個人の価値の正当化を伴う「認識」(価値づけ)に目を向けることであると主張していたと考えられる。

ここまでの帰結を踏まえて第三の検討課題として、「基本的価値」の伝達を志向する価値教育に対するハイトの代替案を明らかにした。彼による代替案とは、価値教育は「価値」を伝達するのではなく、むしろ「価値づけられた対象」の根拠を「試験台に置く」ように論究することであった。ハイトの批判と代替案を通して、日本の道德教育改革を眺める時、もしそれが教え込みのようなマニピュレーションやインドクトリネーションの回避のために「考え・議論する」という教育方法を採用するのであれば、以下のことに留意する必要がある。すなわち、「道德的諸価値」の内容項目の取り扱いについて、それを客観的な価値基準として指定し、その価値に向けて「考え・議論する」のでは(ハイトからすれば)不適切だ、ということである。そうではなくてむしろ、「道德的な価値づけ」が主観的に立ち現れる「行為様式」や「社会状況」を分析し、議論する授業を通して、学習者が自らの根拠ある価値づけを形成していく援助をすることが、彼の主張に沿うのであれば重要であろう。

本研究に関する 2022 年度の研究成果は、以下の研究論文に集約される。

- ・ 平岡秀美 (2023) 「ニーダーザクセン州『価値と規範』における学年・学校段階の接続の試み：教科書 „Leben leben“ を手がかりに」『國學院大學栃木短期大学紀要』(57)、國學院大學栃木短期大学、83-100 頁。
- ・ 平岡秀美 (2024) 「ドイツの倫理科(Fach Ethik)にみる前期・後期中等教育段階での内容的接続：教科書 „Leben leben“ におけるコンピテンシー育成に着目して」『國學院大學栃木短期大学紀要』(58)、國學院大學栃木短期大学、印刷中。

これらの研究論文では、教科書 “Leben leben” の第 1 巻から第 4 巻を検討した。その結果、全巻に共通する点として、「コンピテンシー志向」「言語活動の重視」「テキストを用いた関連知識・学問の顧慮」「問いを中心とした活動」という傾向が見られた。これをより具体的に述べれば、教科書 “Leben leben” の全体構造とそこで倫理・哲学・宗教に関する知識がどのように段階的に取り扱われているのかについて、以下の三点が明らかになった。

まず、テーマ領域を概観すると、以下の三点の特徴が見られた。一点目の特徴として、各巻ともに自分から身近な他者、自らが所属する集団、自らが生きる生活世界の異なる集団に属する人々、そして大規模な環境や世界という問題領域へと同心円状にその関心が徐々に移っていくようなテーマ設定がなされていることが挙げられる。こうしたテーマ内容の範囲そのものに関する共通点は、スパイラル・カリキュラム的に作用し、児童・生徒たちの学びに連続性と発展性を生みだそうとしていることが窺える。上記の一点目の特徴は、促そうとする子どもたちの学習の取り組みにも反映されている。つまり、二点目の特徴として、各巻ともに自己の認識の確認、テキスト解釈、他者認識・集団の認識の解釈と判断、学問分野に基づく調べ学習と視点の引き受けを経由し、さまざまな解釈と判断から初発の自己の認識の熟慮を促すような倫理的判断の機会が用意されていることである。こうした判断の機会の提供が巻を終えるごとに繰り返されていくことにより、「倫理的判断の陶冶の促し」という倫理科の教育目標を達成しようとしていることが分かる。第二の特徴と関連して、第三に、グループでの討論や発表のような活動が、特に第 2 巻の後半に最終段階に位置付けられ、それが第 3 巻において中心的なものとなっているということが挙げられる。この点について、序盤、特に第 1 巻においては、自己の認識の確認に伴う言語活動(「言葉遊び」などのワークを通して言葉を調べることやテキストを解釈する

活動)に重点が置かれ、学習が進むにつれ、それが上記の倫理的判断の機会や後半の調べ学習や討論や発表の基礎となること、さらには後述する後期中等教育段階用の教材(第4巻)に向けて、第3巻以降に徐々に見られる関連学問分野への志向性に向けた橋渡しとなることが想定される。

このような特徴から、後期中等教育段階において倫理や公共性を考える授業を標榜する際の前期中等教育段階までの基礎として、教科書 „Leben leben“ 1～3巻では、「自己から世界へ関心を深めるようなテーマ設定に基づき」、「言語活動と学問分野に基づくテキスト解釈や調べ学習を経て」、「議論や発表の構想に留意する」ことが、学習者の自律的な倫理的判断の育成を目指すのであれば重要視されていることが読み取れる。

さらに、このような1、2巻の傾向と3巻の内容を照らし合わせたときに、上記の三点は「コンピテンシー獲得を志向している」と「徐々に関連学問の枠組みを志向する」という特徴がさらに浮き彫りになる。コンピテンシー志向については、テーマタイトルと並列して獲得することが期待されるコンピテンシーが記載されている。順不同ではあるが、このコンピテンシーについては、「他者共感」、「知覚・認識の反省」、「意見や考えの根拠づけ・論証」、「コンフリクトとの対峙」、「プレゼンテーション」、「道徳的判断」、「他者の観点や多視点の引き受け」、「テキスト解釈や比較」、「集団での議論」、「知識の収集と活用」、「適切な言語使用」、「出来事や状況の分析」の要素がそれぞれのレベルの難易度で含まれていることが分かる。関連学問分野に対する志向性は、3巻になるにつれ一層その傾向が顕著である。すなわち、その関連枠組みとは、第4巻の章構成そのものになっている「人類学(人間学)」、「一般倫理学」、「正義論・法秩序」、「応用倫理」、「宗教」、「論理哲学」である。さらに、4巻での発展的構造として問いを中心としたモジュール・システムの採用という教授上の工夫が明らかになった。

こうした試みは、日本の道德教育に対して示唆的である。すなわち、後期中等教育段階において倫理や公共性を考える授業を標榜するのであれば、初等・前期中等教育段階においては、所与の道徳的諸価値についてそれがなぜ重要なのかというその価値の重要性を前提とした議論を行う「考え議論する」道德教育の構想では不十分であるということである。そうではなくて、むしろ、自己から世界へ関心を深めるようなテーマ設定、言語活動と学問分野に基づくテキスト解釈や調べ学習を経た、議論や発表の構想に留意することが、学習者の自律的な倫理的判断の育成を目指すのであれば重要であるといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 平岡秀美	4. 巻 58
2. 論文標題 ドイツの倫理科(Fach Ethik)にみる前期・後期中等教育段階での内容的接続 : 教科書Leben lebenにおけるコンピテンシー育成に着目して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『國學院大學栃木短期大学紀要』	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平岡秀美	4. 巻 57
2. 論文標題 「ニーダーザクセン州 「価値と規範」 における学年・学校段階の接続の試み : 教科書Leben lebenを手がかりに」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『國學院大學栃木短期大学紀要』	6. 最初と最後の頁 83-100頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平岡秀美	4. 巻 19
2. 論文標題 「ドイツの価値教育 (Werterziehung)における『基本的価値』の取り扱いに対するハイト(Heid, H.)の批判と代替案:価値づけの『根拠の論究』を志向する教授構想に着目して」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『教育方法学研究』	6. 最初と最後の頁 101-112頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 平岡秀美	
2. 発表標題 「ドイツの倫理授業にみる前期・後期中等教育段階での内容的接続 : 教科書Leben lebenをてがかりに」	
3. 学会等名 第102回日本道徳教育学会	
4. 発表年 2023年	

1. 発表者名 平岡秀美
2. 発表標題 「ドイツの倫理授業教材からみる初等教育段階から中等教育段階への接続の試みと課題：教科書Leben lebenを手がかりに」
3. 学会等名 第100回日本道德教育学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------